

野添大辻遺跡（第4次）発掘調査報告

～度会郡大紀町野添所在～

2017（平成29）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

- 1 本書は、平成28年度に実施した三重県度会郡大紀町野添に所在する野添大辻遺跡（第4次）発掘調査にかかる報告書である。
- 2 発掘調査は、平成28年度主要地方道伊勢大宮線（野添）地方道路整備（改築）事業に伴い、工事施工時の工事立会の形式で行った。なお、調査時の経費は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から執行委任を受けた。
- 3 発掘調査期間は平成28年11月7日～平成28年11月11日である。
- 4 発掘調査面積は80m²である。
- 5 発掘調査および整理作業・報告書作成の体制は、以下のとおりである。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
 - 〔平成28年度：発掘調査（工事立会）〕
調査研究1課 主任 渡辺 和仁
主事 杉村 聰
技師 鶴木 厚太
 - 〔平成28年度：整理作業・報告書作成〕
調査研究1課 主任 渡辺 和仁

- 6 本書の執筆・編集および遺物写真的撮影は、渡辺和仁が行った。
- 7 発掘調査および整理作業に際しては、地元野添地区の方々をはじめ、下記の諸氏や機関に御協力を賜った。記して感謝したい。
西 正光、株式会社西工務店、有限会社野田建設、三重県県土整備部（敬称略、順不同）
- 8 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

凡　例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「国東山」「横野」「脇出」「伊勢佐原」(平成12年10月発行)、三重県共有デジタル地図の1:2500地形図(06PF811番)を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した(承認番号:三総合地第148号)。
- 2 標高は東京湾平均海水面(T.P.)を基準とした。
- 3 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第VI座標系の座標北で示した。
- 4 本書で用いる遺構略号は、以下のとおりである。

S E : 井戸 S K : 土坑 S Z : 性格不明遺構 Pit : 柱穴・小穴
- 5 土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社、1967年初版)に掲った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
- 6 遺物実測図(第11図)の縮尺は、すべて(1:4)である。
- 7 遺物観察表(第4表)の凡例は、以下のとおりである。
 - ・色調は外面のみ、標準土色帳の色名を記す。マンセル記号の表記は省略した。
 - ・胎土の緻密さは、粗・やや粗・やや密・密の4段階である。
 - ・土器の残存率は、全周12分割で示す(例:口縁部3/12)。1/12以下のものは「小片」等と示す。
 - ・実測番号は、遺物実測図番号である。
- 8 註は各章の文末に付し、参考文献も註に記した。
- 9 遺構一覧表(第3表)、遺物観察表(第4表)は章中に付した。
- 10 写真図版中の遺物に付した番号は、本文および遺物実測図(第11図)で示す各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。
- 11 中世の時期区分については、南伊勢系土師器を中心とした中世土器の編年(伊藤2008)に即して記した(第III・IV・VI章)。中世土器の編年における暦年代観は、以下に示したとおりである。また、共伴する陶器については、個別の編年を用いたうえで暦年代観を記した(第IV章)。

中世I期(a・b)	11世紀後半~12世紀後半、平安末期
II期(a・b)	12世紀末~14世紀前葉、平安末~鎌倉時代
III期(a・b)	14世紀中葉~15世紀前半、南北朝~室町時代
IV期(a・b・c)	15世紀後半~16世紀末、戦国期

※中世I・II期=中世前期、中世III・IV期=中世後期

目 次

例言・凡例

目 次

I 前 言	1
1 調査の経緯と経過	
2 調査の方法	
II 位置と環境	5
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 遺 構	8
1 基本層序と微地形	
2 検出遺構の概要	
3 小結	
IV 遺 物	15
1 出土遺物の概要	
2 遺構出土の遺物	
3 その他出土の遺物	
V 平成26年度工事立会調査	17
1 調査の概要	
2 検出遺構の概要	
VI 総 括	19
1 野添大辻遺跡と熊野脇道	
2 結語	

挿図目次

第1図	発掘調査位置図	4	第10図	第4次調査区および第3次調査1・2区 (抜粋) 遺構平面図	13
第2図	遺跡分布図	6	第11図	遺物実測図	15
第3図	遺跡周辺地形図	6	第12図	平成26年度工事立会調査区 遺構平面図・土層図	18
第4図	調査区位置図	7	第13図	平成26年度工事立会調査区および 第2次調査1・2区(抜粋) 遺構平面図	18
第5図	グリッド割付図	7			
第6図	調査区壁面土層図	9			
第7図	第1～3次調査土柱状変遷図	9			
第8図	調査区遺構平面図	10			
第9図	S E4001・SK4002・4003・4005・4006 平面図・土層図	12	写真1	S E4001図面作成状況	2

表目次

第1表	主要地方道伊勢大宮線（野添）地方道路 整備（改築）事業に伴う野添大辻遺跡調 査一覧表	1	第2表	基本層序対照表	9
			第3表	遺構一覧表	11
			第4表	遺物観察表	16

写真図版一覧

写真図版1（調査地全景）	写真図版6（土坑ほか）
調査前状況（南西から）	S K4005土層（北東から）
調査地周辺風景（東から）	S K4003・4005完掘状況（南から）
写真図版2（調査区完掘状況）	S K4004土層（西から）
調査区完掘状況（南から）	S K4006土層（南から）
調査区完掘状況（北から）	遺構検出作業状況（北から）
写真図版3（調査区壁面土層）	写真図版7（平成26年度工事立会調査）
調査区壁面A-A'土層（南から）	平成26年度工事立会調査区完掘状況（北から）
調査区壁面B-B'土層（北西から）	平成26年度工事立会調査区壁面土層（北から）
写真図版4（井戸ほか）	写真図版8（出土遺物）
S E4001検出状況・土層（南東から）	遺物2
S E4001半裁状況（南東から）	遺物3
調査区壁面C-C'土層（北東から）	遺物6・7
Pit 1 土層（西から）	遺物10
写真図版5（土坑）	遺物1・4・5・8・9・11
S K4002・4003・4005・4006完掘状況（南東から）	
S K4002土層（北から）	
S K4002完掘状況（北から）	
S K4003土層（南から）	
S K4003完掘状況（南から）	

I 前 言

1 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

主要地方道伊勢大宮線（県道38号線）は、伊勢市から旧大宮町（現大紀町）を結ぶ主要道であり、主に宮川沿いの山間部を貫く。一部に幅員が狭い区間などが存在するため、部分的にバイパス建設や拡幅工事が行われている。

野添大辻遺跡は、本事業に伴って行われた事業地内の分布調査で把握された遺跡である。平成23年度には範囲確認調査を行い、本事業に伴う埋蔵文化財の対応箇所を決定し、約2,780m²が要調査範囲となつた。平成24年度には第1次調査、平成25年度には第2次調査、平成26年度には第3次調査が本発掘調査として行われた（第1図）。その他、既存道路などで第1～3次調査で調査が実施できなかつた箇所については、平成24～26年度にかけて、道路の本体工事に合せた工事立会を実施している。

第4次調査範囲は、第3次調査で調査ができなかつた県道から田畠へ乗り入れるための道部分であり、担当の開発事業部局である三重県県土整備部伊勢建設事務所事業推進室道路二課と協議・調整のうえ、施工時の工事立会として実施した（第1図）。

なお、これまでの既往調査（本発掘調査および工事立会）の実施状況と報告書刊行については、第1表にまとめたとおりである。

(2) 既往調査の成果

野添大辻遺跡の本事業に伴う発掘調査は、平成24～26年度にかけて第1～3次調査までが行われている（第1表）。以下では、これまでの調査成果について調査次数ごとに述べていきたい。

第1次調査⁽¹⁾ 第1次調査は、遺跡のほぼ中央部で行われた調査であり、中垣内地において縄文時代早期の竪穴住居6棟、煙道付炉穴11基などが確認され、大量の押型文土器（大川式）が出土した。第1次以降の調査では、明確な縄文時代の遺構が確認さ

第1表 主要地方道伊勢大宮線（野添）地方道路整備（改築）事業に伴う野添大辻遺跡調査一覧表

調査名	調査種別	調査期間	調査面積	報告	検出遺構
野添大辻遺跡	範囲確認	平成23年9月5日～平成23年9月9日	99m ²	三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第1次）発掘調査報告』2014年	事業予定地内に33ヶ所の調査坑を設定して実施。遺構・遺物が確認された計約2,780m ² を要調査範囲と判断。
野添大辻遺跡（第1次）	本発掘	平成24年5月6日～平成24年9月25日	907m ²		縄文時代早期の竪穴住居6棟、煙道付炉穴11基、室町時代の井戸などを検出。
野添大辻遺跡	工事立会	平成24年11月15・16・21日 平成25年1月9日	90m ²		
野添大辻遺跡（第2次）	本発掘	平成25年4月17日～平成25年7月26日	1,023m ²	三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』2015年	室町時代の道路3条、黒柱建物7棟、井戸1基などを検出。
野添大辻遺跡	工事立会	平成26年3月6日 平成26年11月26日	約50m ²		
野添大辻遺跡（第3次）	本発掘	平成26年5月9日～平成26年8月11日	846m ²	三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第3次）発掘調査報告』2016年	室町時代の掘立柱建物3棟、柱列4条、井戸3基などを検出。
野添大辻遺跡	工事立会	平成27年1月16日	11m ²	本書	室町時代の井戸1基、時期不明の土坑5基などを検出。
野添大辻遺跡（第4次）	工事立会	平成28年11月7日～平成28年11月11日	80m ²		

れなかったことから、当該期の集落跡が調査区（中垣内地区）を含む直径約40mの範囲に限定して広がっている可能性が高いことが明らかになった。

また、室町時代を中心に中世の遺構・遺物も確認された。確認された遺構は、井戸3基、石組土坑1基などであり、15世紀代を中心とする中世集落跡があることが明らかになった。

第2次調査^{②)} 第2次調査は、第1次調査地から東約70mのところで行われた調査であり、戦国期（16世紀代）を中心として近代に至るまでの遺構が確認されている。

戦国期の遺構としては、掘立柱建物7棟をはじめ石組の井戸などが確認されている。このうち石組井戸からは、朝鮮ないし琉球風炉と呼ばれる青銅製風炉を忠実に写した瓦質の風炉が出土した。風炉は形態がほぼ明らかな状態で出土しており、このような出土例は全国的にみても極めて少ないとから、貴重な資料となった。

また、現県道と重なる近世以前の熊野脇道（瀧原道）とそこから派生する室町時代の枝道が2条確認された。確認された枝道を含め、遺構が熊野脇道を意識して配置されていたことから、熊野脇道を軸とした集落が少なからず室町時代に成立していたことが明らかになった。

第3次調査^{③)} 第3次調査は、第1次調査地から西約250mのところで行われた調査であり、第2次調査とほぼ同時期である戦国期を中心とした遺構が確認されている。

戦国期の遺構は、掘立柱建物3棟をはじめ井戸や土坑などが確認されており、ピット1基からは偏平舟形光背宝塔型泥塔がほぼ完全な形で出土した。泥塔の出土は、三重県内で9例目の事例であり、当地での中世における宗教的な信仰や祭祀を考える上で非常に興味深い成果になった。

（3）第4次調査の経過

第4次調査は、既存の乗り入れ道部分を撤去した後に着手した。発掘調査（工事立会）期間は、平成28年11月7日～平成28年11月11日である。

以下、調査日誌（抄）を記す。



写真1 S E4001面図作成状況

調査日誌（抄）

〔平成28（2016）年〕

10月20日 現地協議（出席者：伊勢建設事務所、株式会社西工務店、有限会社野田建設、三重県埋蔵文化財センター）
11月7日 第4次調査（工事立会）開始。表土掘削および遺構検出開始・終了。
8日 遺構掘削開始。S K4004完掘。南側のみ遺構再検出。昼前より降雨のため、午前で調査中止。

9日 遺構掘削継続。S K4002・4003・4005・4006完掘。調査区内で検出されている全ピット完掘。S E4001掘削開始。埋土からは、無数の石材が出土。約30cm程度掘り下げた段階で人力掘削終了。調査区内清掃。

10日 調査区完掘状況全景写真撮影。S K4002・4003・4005・4006部分写真撮影。S E4001土層写真撮影。調査区壁面土層写真撮影。調査区平面図作成。調査区壁面土層図作成。

11日 重機にてS E4001掘削・半裁。石組であ

ることを想定して掘削したが、ランダムに無数の石材が出土する状況。S E 4001 土層図作成および土層写真撮影。G L ー 約3mまで掘削して終了。井戸の埋戻し開始、調査区壁面土層図作成・終了。記録作業を全て終了したため、本日ももって調査（工事立会）終了。

（4）文化財保護法にかかる諸手続

第4次調査に伴う埋蔵文化財の文化財保護法等に関係する法的措置は、以下のとおりである。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知）

・平成28年9月9日付け、伊建第1711号

②文化財保護法第100条第2項に基づく「埋蔵文化財の発見・認定通知」（大台警察署長あて三重県教育委員会教育長通知）

・平成28年12月12日付け、教委第12-4419号

2 調査の方法

（1）調査区の設定

調査区は、第3次調査の1・2区をつなぐ範囲であり、未調査部分が生じないよう1・2区とラップさせるかたちで設定した。

前項でも述べたように施工時の工事立会であることから、地区杭の設置ができなかつた。そのため、第1～3次で用いられている大地区および小地区割によるグリットは、調査時においては用いず、本体工事で用いる丁張を任意の地区境として調査区を4分割し、それぞれ仮に1～4小区とした。

また、本報告では既往調査との整合性をつけるため、調査後に既往調査区と本調査区の位置関係を図面で合わせた。そのため、本書では既往調査で用いられているグリット名を改めて付与して報告する。

（2）遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機（バックホー）で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。なお、重機については、工事施工業者である株式会社西工務店および有限会社野田建設から提供を受けた。遺

構掘削と記録作業は、三重県埋蔵文化財センター職員が行った。なお、井戸の最終的な断ち割りについては、表土掘削と同様に工事施工業者から重機の提供を受け、重機を補助的に用いながら行った。

（3）記録・図化

遺構実測は、三重県埋蔵文化財センター職員による手測りである。調査手法が通常の本発掘調査とは異なるため、1/40の略測図（遺構カード）や1/100の遺構配置図は作成せず、担当職員が遺構検出後に任意のメモ図を作成し、現地での位置関係等を検討したうえで、遺構の掘削を行い、必要に応じて1/20の土層図を作成した。また、工事施工業者の協力を受けて調査区の測量を行い、それを基準に1/20の調査区遺構平面図を作成した。これらの図面に加えて現場の作業日誌も当センターで保管している。

遺構番号はピットを除き、通し番号を付与した。調査次数ごとの遺構を区別するため、第4次調査の「4」を冒頭に付し、4000番台としている（例：S E 4001…）。なお、本書においては調査時の番号をそのまま用いて報告する。ピットの遺構番号は、調査区全体での通し番号（Pit 1…）としている。

本調査における遺構の写真撮影は、すべてデジタル一眼レフカメラで行った。使用したデジタル一眼レフカメラは、ニコンD3300およびニコンD800Eであり、コンパクトデジタルカメラを補助的に用いた。遺物の写真撮影は、ニコンD800Eを用いた。

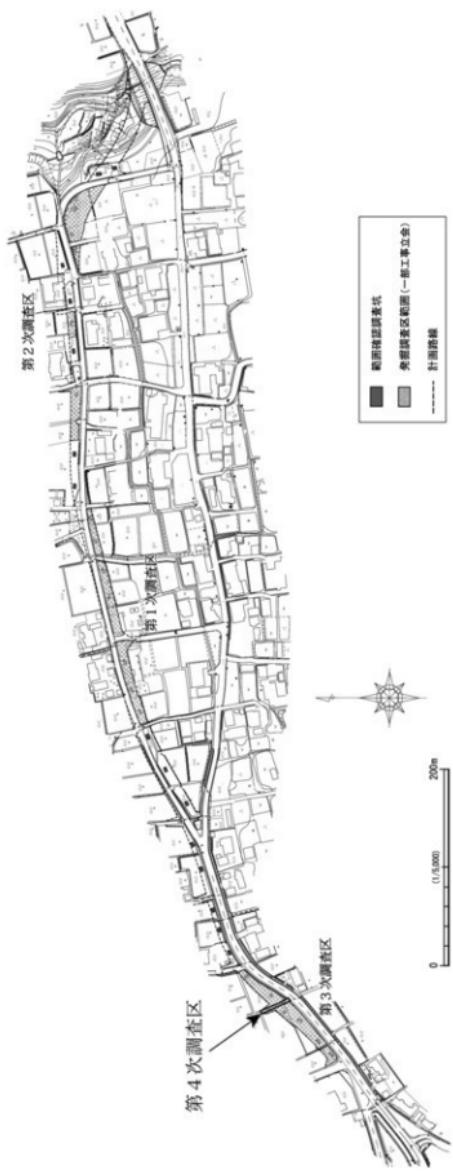
（4）出土遺物の整理

出土遺物は、出土年月日と遺構・層位の区別を行い、前項（1）で述べた地区単位で取りあげた。

整理作業終了後は、報告書掲載遺物（A遺物：実測可能な遺物）と未掲載遺物（B遺物：実測困難な遺物）に区分して保管した。

註

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第1次）発掘調査報告』2014年
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』2015年
- (3) 三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第3次）発掘調査報告』2016年



第1図 余留調査位置図

II 位置と環境

本章の内容については、第1～3次調査の各報告書で詳細に述べられており、以下ではその内容を抜粋するかたちで述べる（第2・3図）。

1 地理的環境

（1）位置

野添大辻遺跡（1）は、三重県度会郡大紀町野添（旧大宮町域）にある縄文時代～中世の集落跡である（第2図）。大紀町は三重県南部に位置し、町内の地形は宮川流域の山間部と、熊野灘に面した海岸部に大別される。遺跡は、宮川の河口から30km遡上したところに立地し、標高は海拔約60m前後である。宮川右岸側にあたる七瀬岳（778m）や国見岩（734m）などの山地は、古代における伊勢国と志摩国の国境であった。これらの山岳より発する宮川支流の藤川を遡上し、藤坂峠を越えると17km程で神前湾・賛湾へ至る。また、大内山川を経て熊野街道を行けば熊野三山に達し、奥伊勢、志摩、熊野を結ぶ結節点としての交通の要衝地になっている。

（2）地質

宮川は中央構造線外帯のうち三波川変成帯に属し、遺跡周辺の基盤岩は泥質片岩である。宮川上流域や支流の藤川・大内山川流域は、秩父累帯に属するため、流域に砂岩・泥岩・チャート等を供給している。

（3）宮川と段丘地形

宮川は三重県と奈良県境の大台ヶ原を源流とし、大内山川・藤川・一之瀬川・横輪川等の支流と交わって県南部を東流する。宮川が大きく蛇行する中流域では河岸段丘が発達し、沖積平野は下流域にのみ形成されている。段丘面と宮川の高低差は、約30mで深い渓谷状となっており、当遺跡は宮川中流域の右岸段丘上に位置している。

2 歴史的環境

（1）旧石器～縄文時代

宮川中流域には旧石器～縄文時代の遺跡が多数存

在する。旧石器時代の遺跡は、宮川と濁川の合流点に出張遺跡（9）があり⁽¹⁾、ナイフ形石器・スクレイバーや多くの石核や剥片が出土している。また、野添大辻遺跡でも確認されている縄文時代前期の広域テフラ（K-Ah）が、黒ボク土中に確認されている。

縄文時代の遺跡は、桶ノ谷遺跡（11）で縄文早期～晩期の堅穴住居や土坑などが見つかっており⁽²⁾、出土した早期の押型土器は、神並上層式の代表例である。前期主体の野手遺跡（2）では⁽³⁾、早期～後期の土器・石器や玦状耳飾が採集されている。

（2）弥生時代～古代

弥生時代の遺跡は、大西遺跡（4）、引瀬遺跡（6）などの遺物散布地があるのみであり、古墳時代については、滝原地区の長者野古墳群がある程度である。また、古代を語る上で重要な皇大神宮の別宮「滝原宮」があるが、古代の遺跡は未だ不明である。

（3）中世以降

隣接する大台町には、北畠氏と関わりが強い三瀬館跡や下三瀬城跡があり⁽⁴⁾、当遺跡の近傍には奈良井城跡（14）、栗生城跡⁽⁵⁾（18）といった北畠氏を支えた在地勢力の城館が分布する。

当遺跡がある野添地区には、宮川右岸から藤川をたどり滝原宮を通過し、熊野へ至る熊野脇道（滝原道）が通る。この熊野脇道は、現在の主要地方道伊勢大宮線にほぼ重なると考えられており、当遺跡第2次調査では熊野脇道の一部が確認されている⁽⁶⁾。

註

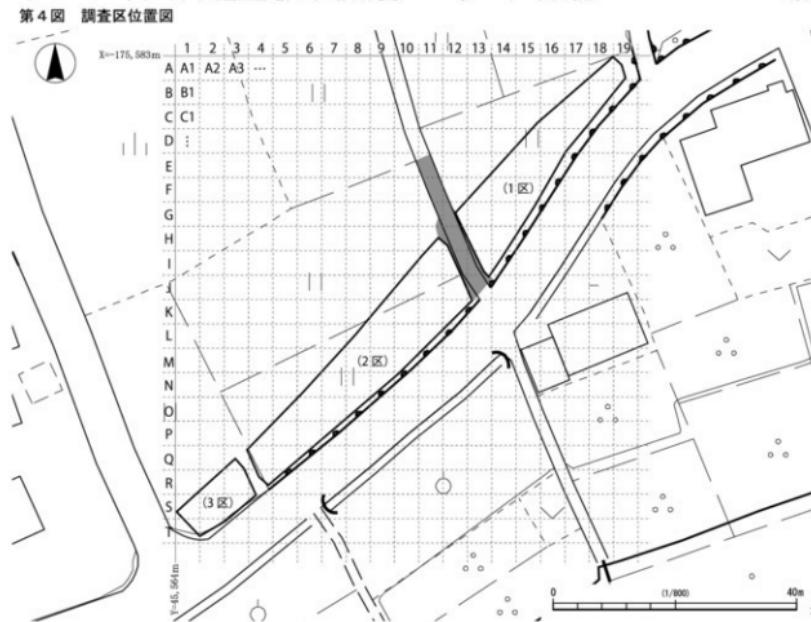
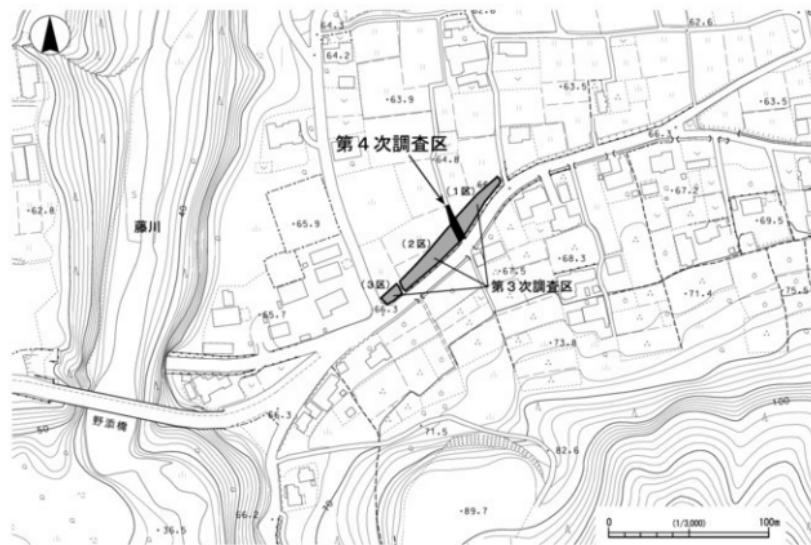
- （1）大台町出張遺跡調査会『出張遺跡調査報告書』1979年
- （2）三重県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告（桶ノ谷遺跡）』1983年
- （3）大宮町『大宮町史』歴史編 1987年
- （4）大台町『大台町史』通史 1997年
- （5）三重県埋蔵文化財センター『栗生城跡』2002年
- （6）三重県教育委員会『歴史の道調査報告書（熊野街道）』I 1981年、三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』2015年



第2図 遺跡分布図



第3図 遺跡周辺地形図



III 遺構

1 基本層序と微地形

(1) 基本層序

基本層序は、以下の通りである（第6図、第2表、写真図版3・4）。なお、参考として第1～3次調査における層序の対比については、土層柱状図（第7図）で示している。

- I：現耕土・造成土（表土）
- II：旧耕作土・整地層等（近世～近代の地表面）
- III：中世の遺物包含層（黒ボク土を起源とする粗砂混じりのシルト層）
- IV：黒ボク土（中世遺構のベース土）
- V：褐色シルト（自然堆積層）
- VI：黄褐色礫混じりシルト～浅黄色礫（地山である段丘基盤層）

I層は、表土となる水田や畑の耕作土および乗り入れ道に伴う造成土である。調査区が第3次調査区と一部が重なっているため、その埋戻し土も含んでいる。

II層は、旧耕作土および現代以前の整地等に伴う堆積層である。各層間には、周辺丘陵・山地からの流水土とみられる黄褐色砂礫が挟まれることがある。

III層は、黒ボク土を起源とする土壤あるいは旧耕作土である。中世以降の耕作に起因するものと考えられ、土師器などの中世の遺物を含んでおり、遺物包含層として捉えられる。第1～3次調査の成果によれば、稀に本層上面から切り込む中世遺構が確認されている。しかし、風倒木や根株跡が遺構と一緒に認められるほか、下面では生痕が著しいため、本層上面での遺構検出は極めて困難である。

IV層は、いわゆる黒ボク土である。黒色のきめの細かいシルト層で、砂礫の混入は少ない。本層は便宜的に上位と下位に区分したが、層相の違いは極めて漸次的であり、下方に向かって色調が灰色となる。第1・2次調査成果では、本層上・中位からは広域テフラ（K-Ah : 6,300BP）が検出されている⁽¹⁾。

V層は地山のVI層直上に堆積した自然堆積層である。第1次調査で確認されている縄文時代早期の遺

構は、本層上面で検出されている。土壤分析の成果ではテフラが確認されていないことから、本層は広域テフラ（K-Ah）の降灰以前に堆積した層となる。

VI層は、段丘を形成する基盤層である。本調査では、時間的な制約から調査区壁面沿いで土層確認の断削が実施できなかったため、井戸を重機で大きく半堀した際の土層や土坑などの遺構側面の土層により確認した。

(2) 調査地の微地形

調査前の土地利用は前述しているように、県道38号線から田畠への乗り入れ道であった（写真図版1）。その周辺には、水田と畑が宮川に向かって広がる。

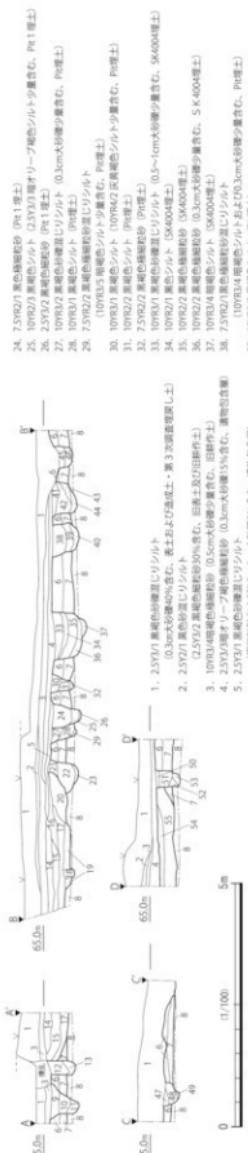
第3次調査を含めた成果⁽²⁾によれば、第4次調査区周辺のIV層（中世遺構面）とVI層（地山）は、南西から北東にかけて緩やかに低くなることがわかつている。遺跡全体において既往調査により把握されたIV～VI層の標高を比較すると、第2次調査1・2区が64～66m程と最も高く、第2次調査3～5区にかけて約61～62m程と最も低くなる。第1次調査区は63m前後で高低差が小さく、さらに西側の第3次調査区にかけて緩やかに傾斜する地形となっている。

(3) 遺構検出面

本調査では、IV層からV層上面で遺構検出を行った。本来、中世遺構面となるIV層上面で遺構検出を行うべきであるが、通常の発掘調査と違い工事立会での調査であり、遺構を的確かつ迅速に把握する必要があった。そのため、遺構埋土との違いが明瞭に認識できるV層上面または、表土掘削する中で認識できた部分のみIV層中で遺構を検出している。調査区壁面土層で確認作業と記録を最大限行い、既往調査との整合性を図った。

2 検出遺構の概要

本調査では、室町時代（戦国期）の遺構および時期不明の遺構を検出した（第8図、写真図版2）。調査区と東西で接する第3次調査区で検出されている遺構とほぼ同時期の遺構であり、第2次調査で主



第6図 調査区壁面図

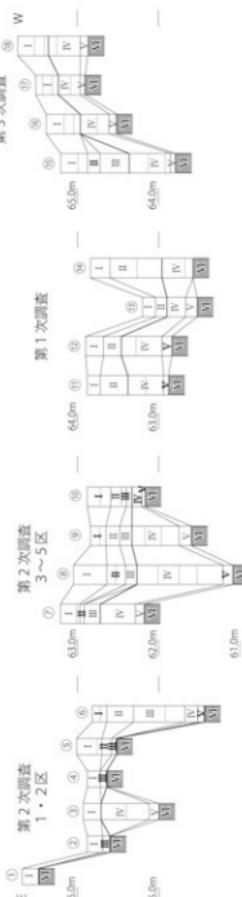
第2表 基本層序対照表

第1次調査	
Ⅰ 現地踏査・実測・底土等	第6回：1層
Ⅱ 逐井・近代鉱・懸孤等	第7回：2・3層
Ⅲ 内層には(中)岩礁(中)岩礁(中)岩礁等	第8回：4・5層
Ⅳ 無名谷(下)岩礁(中)岩礁等	第9回：6・7層 ※13.5mを(谷)
V 極灰岩・併共生化質土(第1次調査)等(岩礁等に付記)	第6回：1層
VI 明黄褐色粘土・岩礁等(山、丘、基礎等)	第9回：9～12層

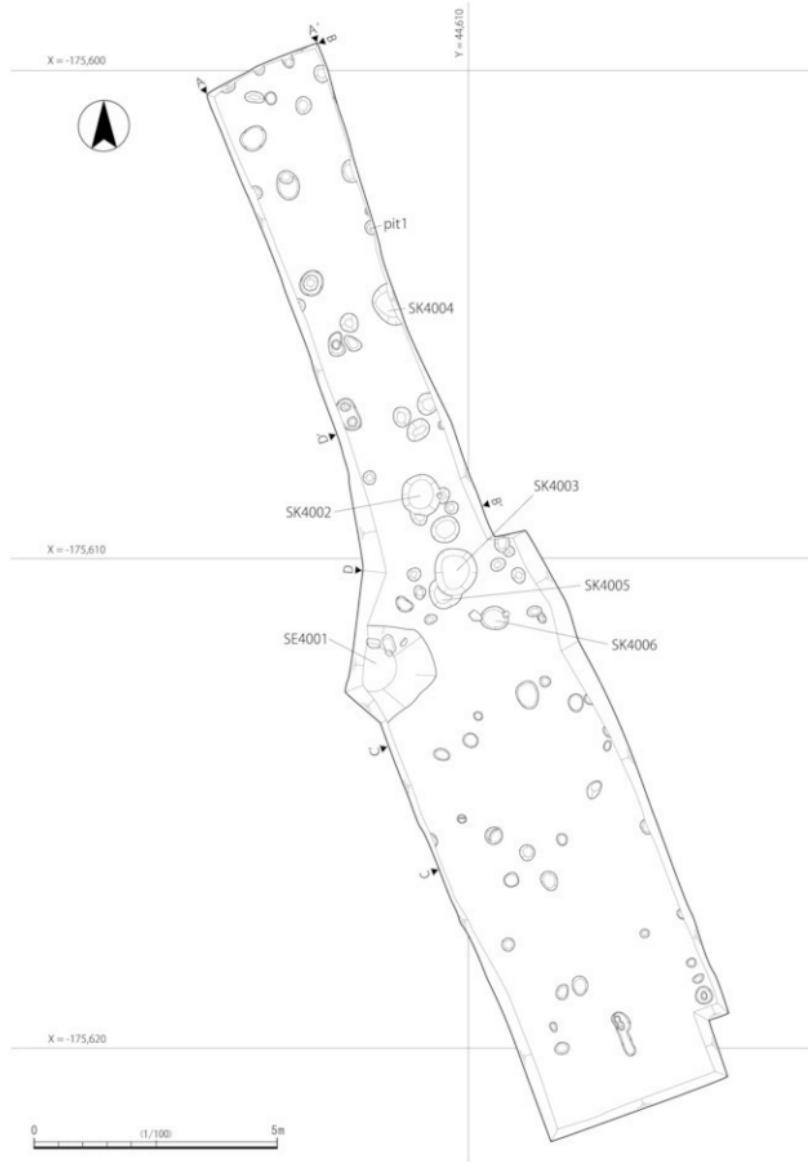
1. 2/30/1 黄褐色細粒砂質シルト
(0.2cm×5cmの白色・灰色・褐色の塊状混在する)
2. 2/30/1 黄褐色シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
3. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
4. 2/30/1 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
5. 2/30/1 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
6. 1/9/21 黄褐色シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
7. 2/30/1 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
8. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
9. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
10. 7/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
11. 7/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
12. 7/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
13. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
14. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
15. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
16. 7/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
17. 7/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
18. 7/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
19. 5/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
20. 2/30/1 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
21. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.2cm×5cmの白色・灰色の塊状混在する)
22. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
23. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)

24. 2/30/1 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
25. 1/9/21 黄褐色シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
26. 2/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
27. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
28. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
29. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
30. 1/9/21 黄褐色シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
31. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
32. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
33. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
34. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
35. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
36. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
37. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
38. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
39. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
40. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
41. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
42. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
43. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
44. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
45. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
46. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
47. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
48. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
49. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
50. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
51. 2/30/2 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
52. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
53. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
54. 1/9/21 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)
55. 2/30/1 黄褐色細粒砂質シルト
(0.5cm×10cmの白色・灰色の塊状混在する)

第3次調査



第7図 第1～3次調査区土層柱状変遷図 (1/60)



第8図 調査区遺構平面図

第3表 遺構一覧表

遺構名	グリッド	性格	時期	形状	規模 (m)			主な遺物	備考
					長径 (直径)	幅	深さ		
SE4001	G・H11 G・H12	井戸	中世IVb	楕円形	2.85	2.35	2.73	土師器・陶器	SE3015（第3次調査） と同一遺構
SK4002	G12	土坑	不明	円形	0.84	0.8	0.13	なし	
SK4003	G12	土坑	不明	楕円形	0.98	0.86	0.12	なし	
SK4004	F12	土坑	不明	不明（円形か）	1.0	-	0.55	なし	壁面土層で深さを確認
SK4005	G12	土坑	不明	円形	0.5	-	0.17	なし	
SK4006	H12	土坑	不明	楕円形	0.55	0.45	0.1	なし	
SZ4007	E11	落ち込み	不明	不明（断面のみ）	2.8以上	-	0.5	土師器（小片）	時期の認定困難 壁面土層でのみ確認
SZ4008	G11・12	落ち込み	不明	不明（断面のみ）	3.0前後	-	0.4	土師器（小片）	時期の認定困難 壁面土層でのみ確認

体的に確認されている遺構の時期とも大きな差がない。なお、第1次調査で検出されている縄文時代早期の遺構や遺物は確認できなかった。

以下の報文では、遺構種別ごとに記述する。遺構の詳細については、遺構一覧表（第3表）を参照されたい。また、土層については調査区壁面の土層内で極力示し（第6図）、壁面にかかっていないものは個別に土層図を示す（第9図）。

なお、遺構の年代と時期については、凡例に示した南伊勢系土師器の編年⁽³⁾に基づく時期区分と年代観を用いて示す。

（1）井戸

S E4001（第9図、写真図版4）

調査区中央東隅で検出した径2.35~2.85m、深さ2.7m前後で、平面が不整形な楕円形を呈する井戸である。S Z4008と重複しており、切り合い関係からS Z4008よりも新しい。なお、S E4001は第3次調査で検出されているS E3015と同一遺構である⁽⁴⁾。第3次調査では、大部分が調査区外に広がっていたため、一部分しか調査できなかったが、本調査では井戸の大部分について調査することができた。

埋土は、粗砂を多く含む黒褐色～黒色シルトと繰り返し、拳大～人頭大までのチャートや砂岩などの石材が大量に出土した。第3次調査の成果から、石組井戸である可能性が想定されたため、井戸枠となる石材が残存していることを念頭に調査を行った。しかし、埋土からは石材が土中に入り乱れた状態で出土し、底面（検出面から-1.85m前後）まで掘削を行ったが、石組といえるものは確認できなかった。また、井戸側面の掘形は地山にむかって大きくオーバーハングしていた。このような状況から、井戸枠の石材が大きく崩落してしまったものと考えられる。

検出時の平面形状が、円形から大きく崩れた楕円形であること、石材が崩落したことによる影響を反映しているのであろう。底面は、基盤層となる浅黄色繊維が露出する状態であり、渴水期のためか積極的な湧水は認められなかった。

埋土からは、中世IV b期の南伊勢系土師器鍋や瀬戸美濃産の陶器碗、常滑産とみられる陶器鉢が出土した。時期は、出土遺物から16世紀前半頃（戦国期）と考えられる。

（2）土坑

S K4002（第9図、写真図版5）

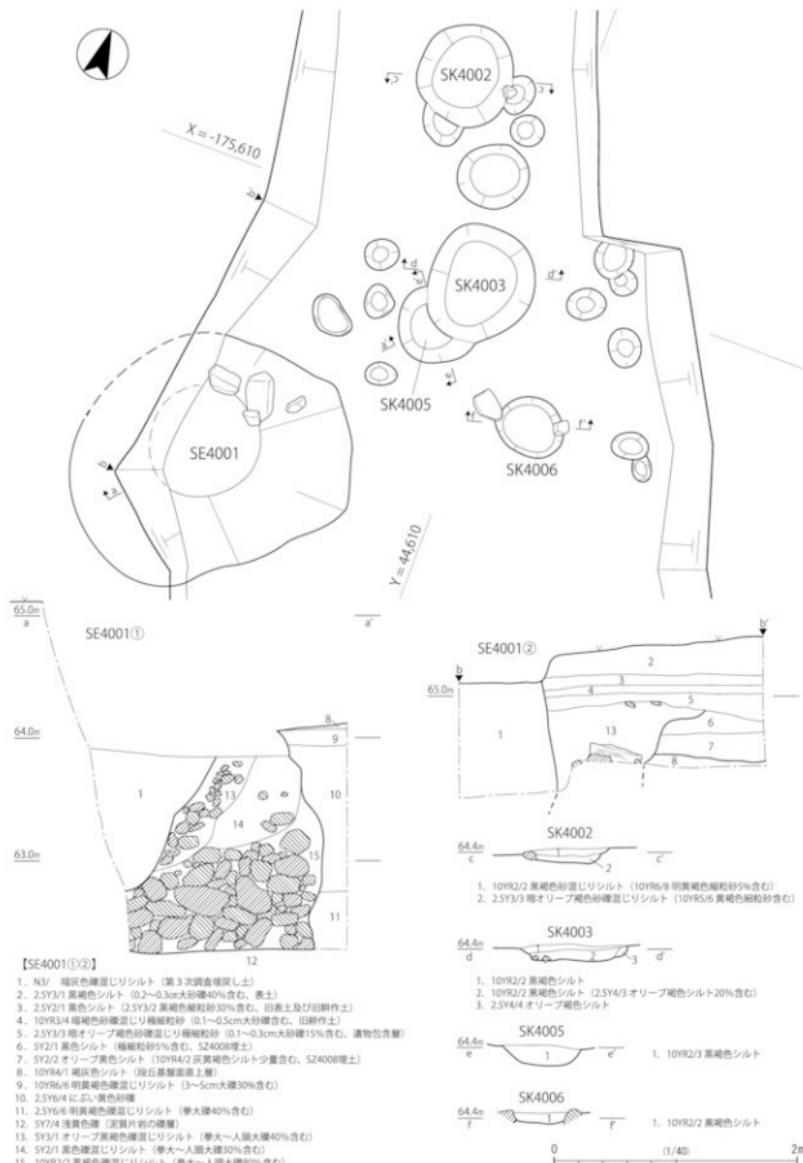
調査区中央で検出した径0.84m、深さ0.13mで、平面が円形を呈する土坑である。埋土は、黒褐色シルトおよび暗オリーブ褐色シルトである。埋土から遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

S K4003（第9図、写真図版5・6）

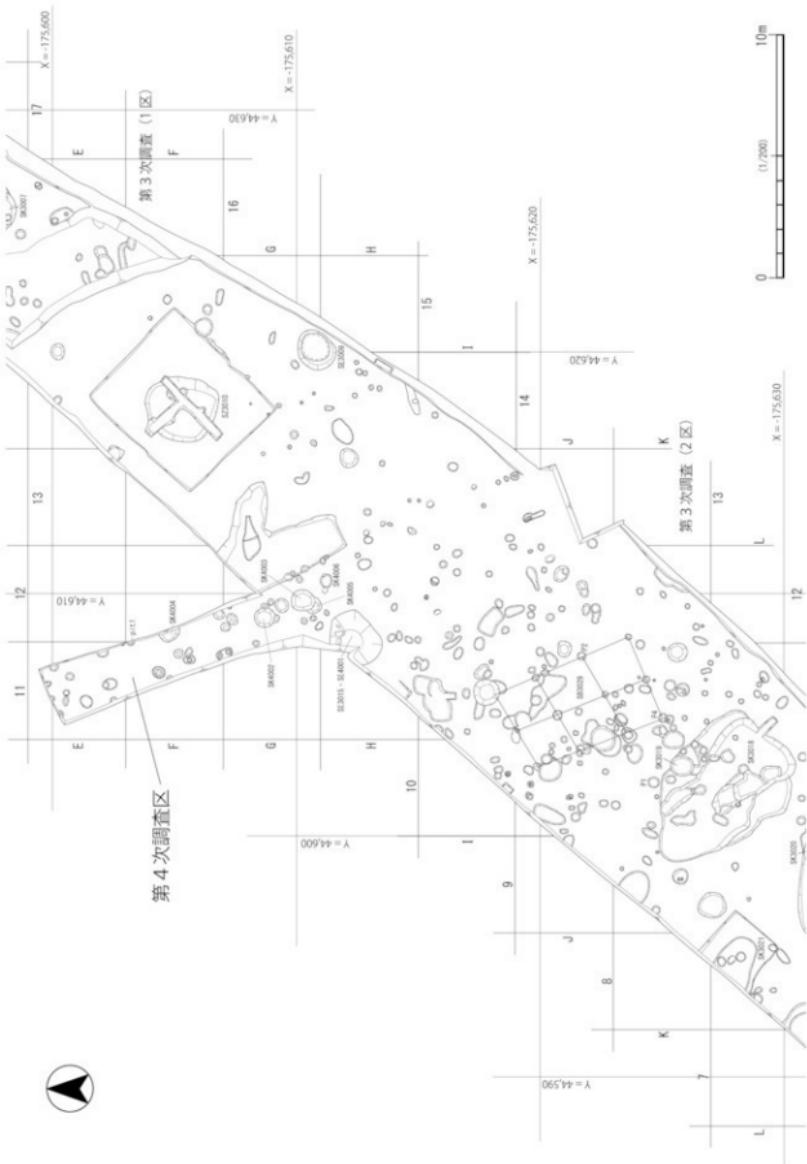
調査区中央で検出した径0.86~0.98m、深さ0.12mで、平面が楕円形を呈する土坑である。S K4005と重複しており、切り合い関係からS K4005よりも新しい。埋土は、黒褐色シルトおよびオリーブ褐色シルトを含む黒褐色シルトである。埋土から遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

S K4004（第6・8図、写真図版6）

調査区の東壁面沿いで検出した径1m、深さ0.55mの土坑である。平面では、土坑の底面近くを検出し、調査できたのが全体の約半分であるため、土坑の詳細な形状は不明である。土坑本来の深さは、調査区東壁面土層で確認することができた。埋土は黒



第9図 S E4001・S K4002・4003・4005・4006平面図・土層図



第10図 第4次調査区および第3次調査1・2区(抜粋)遺構平面図

褐色シルトおよび暗褐色シルトである。埋土から遺物が出土しなかつたため、時期は明らかでない。

S K4005（第9図、写真図版5・6）

調査区中央で検出した径約0.5m前後、深さ0.17mで、平面が円形になるとみられる土坑である。S K4003と重複しており、切り合い関係からS K4003よりも古い。埋土は黒褐色シルトの単層である。埋土から遺物が出土しなかつたため、時期は明らかでない。

S K4006（第9図、写真図版6）

調査区中央で検出した径0.45～0.55m、深さ0.1mで、平面が梢円形を呈する土坑である。埋土は黒褐色シルトの単層である。埋土から遺物が出土しなかつたため、時期は明らかでない。

（3）落ち込み状遺構

落ち込み状遺構は、平面では検出することができず、表土掘削後に調査区壁面を精査して確認した。

S Z4007（第6図）

調査区東壁面および北壁面で確認した落ち込み状の遺構である。壁面土層から把握できる大きさは、幅2.8m以上、深さ0.5m前後で、調査区外の北東に向かって広がると思われる。埋土は、黒褐色シルトおよび黒色シルトである。埋土からは土師器の粒状の小片が出土したが、時期は明らかでない。

S Z4008（第6図）

調査区西壁面で確認した落ち込み状の遺構である。壁面土層から把握できる規模は、幅約3m前後、深さ0.4m前後である⁽⁵⁾。落ち込みの両端は、ピットおよびS E4001によって切られている。埋土は灰色～黄色シルトの混じる黒色シルトであり、土師器の粒状の小片が出土したが、時期は明らかでない。

（4）ピット

Pit 1（第6・8図、写真図版4）

調査区東壁面沿いで検出した径約0.5mで、平面が円形を呈するピットである。Pit 1は、壁面土層の状況から深さ0.5m前後のものと考えられる。埋土は、黒褐色～黒色シルトであり、土師器の小片が出土したが、時期は明らかでない。

このほか、調査区内的平面および壁面土層では、径0.2～0.5m前後のピットを多数検出し、確認した。調査の結果、いずれのピットの埋土からも遺物が出

土しなかつたため、時期は明らかでない。

3 小結

本調査では、井戸・土坑・ピットなどの多数の遺構を検出した。このうち、唯一時期がわかる遺構はS E4001である。第3次調査と本調査での出土遺物から、16世紀前半の戦国期のものであることが明確になった。

それ以外の遺構については、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は明らかでない。しかし、本調査区と接する第3次調査区で確認されている遺構・遺物は、大半が戦国期を含む室町時代を中心とした中世後期（Ⅲ・Ⅳ期）であり、本調査の遺物包含層（Ⅲ層）から出土している遺物の時期もすべて中世後期の中で捉えられる。これらの状況から推測すると、本調査で遺物が出土しなかつた土坑やピットの大半は、室町時代を中心とする中世後期の遺構である可能性が高い⁽⁶⁾と考えられる。

註

- （1）三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』2015年
- （2）三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第3次）発掘調査報告』2016年
- （3）伊藤裕像「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年
- （4）前掲註（2）文献
- （5）落ち込み状の遺構として報告したが、遺構としての機能が明瞭でないため、黒ボク土堆積後の二次堆積層である可能性も考えうる。
- （6）本調査では、明確に中世後期以外の時期に該当する遺物は確認されていない。

IV 遺 物

1 出土遺物の概要

第4次調査の出土遺物は、土器・陶器である。総量はコンテナ換算で1箱分、重量が1.0kg（整理前）である。

出土遺物の時期は、戦国期を含む室町時代に限定される。各遺物の詳細については、遺物観察表（第4表）を参照されたい。以下、遺構出土およびその他出土（遺物包含層・旧耕作土）に分けて記述する⁽¹⁾。

2 遺構出土の遺物

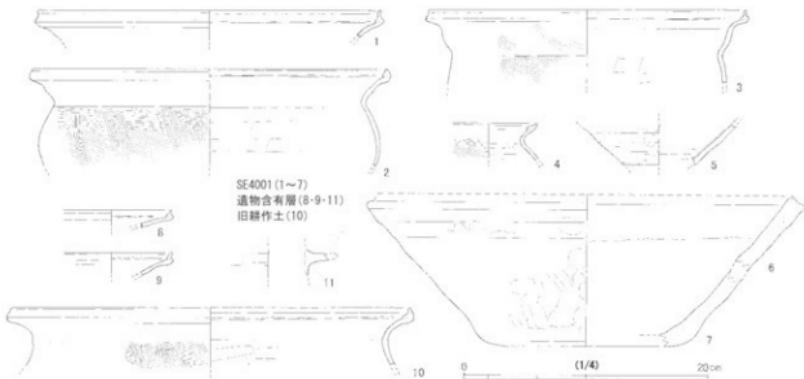
遺構出土の遺物は（第11図、写真図版8）、SE4001のみに限られる。

1～4は、土器師の鍋である。いずれも南伊勢系土器師であり、口縁部から体部中位にかけての破片である。1・2は中型（口径25cm～30cm前後）の鍋B、3は中型（口径25cm前後）の鍋C、4は小片のため断定できないが、残存状況から小型（口径18cm～20cm前後）の鍋Aと考えられる。口縁部は、いずれも内側に折り返されており、1～3の口縁端部は

上方につまみ上げられてまとめられているが、4は外へと直線的にのびる。3の頸部は屈曲がゆるい。調整は、体部外面がハケメ、内面は板状工具によるナデが施される。いずれも中世IV期bのもので、時期は16世紀前半（戦国期）と考えられる⁽²⁾。

5は陶器の平碗である。瀬戸美濃産のものであり、体部下位の破片である。調整は、内・外面ともにロクロケズリまたはロクロナデが施され、内面と外面の一部には灰釉がみられる。瀬戸美濃大窯編年における第2段階のもので、時期は16世紀前半（戦国期）におさまるものであろう。

6・7は陶器の捏鉢である。6は口縁部片、7は底部片で、焼成・胎土から同一個体のものと考えられ、常滑産である可能性が高い。6の体部から口縁部は直線的にのび、口縁端部の外傾面には明瞭な凹線がめぐり、表面の一部が剥離してしまっている。個別破片であることから、正確な大きさは不明だが、図面から復元される法量は、口径34cm前後、底部径16cm前後、器高12cm前後のものと考えられる。いずれとも内・外面の調整は、ロクロナデおよびナデが施され、外面上にはユビオサエの痕跡がみられる。また、内面は頻繁に使用されたためか、よく研磨され



第11図 遺物実測図

第4表 遺物観察表

No	実測 番号	種類 (產地)	器種	グリッド	遺構・辨位	残存度	法量 (cm) 口径 底径 器高	技術・文様の特徴 施釉	胎土	焼成	色調 (外面)	特記事項
1	002-03	土器部	縦	B12	SE4001	口縁部 1/12	28.0	— 内:コブテ 外:コブテ	密	—	にぬく 黄褐色	
2	002-01	土器部	縦	B12	SE4001	口縁部 1/12	29.0	— 内:コブテ ¹ , 工具印 ² 外:コブテ ¹ , 小片 ²	密	—	淡黄褐色	外底保付着
3	002-03	土器部	縦	B12	SE4001	口縁部 1/12	26.0	— 内:コブテ ¹ , 工具印 ² 外:コブテ ¹ , 小片 ²	密	—	褐灰	外底保付着
4	003-04	土器部	縦	B12	SE4001	口縁部 小片	—	— 内:コブテ ¹ , 工具印 ² 外:コブテ ¹ , 小片 ²	密	—	にぬく 黄褐色	
5	003-01	陶器 (瀬戸美濃)	平盤	B12	SE4001	全体 小片	—	— 内:コブテ ¹ , 斧輪 ² 外:コブテ ¹ , カット ² , 斧輪	密	良	灰黃	
6	001-01	陶器 (瀬戸)	理鉢	B12	SE4001	口縁部 小片	33.8	— 内:コブテ ¹ 外:コブテ ¹ , 22°斜 ²	やや 粗	良	にぬく 褐色	口縁部の一部が剥離 内底研磨痕あり
7	001-02	陶器 (瀬戸)	理鉢	B12	SE4001	底部 小片	—	16.4 内:コブテ ¹ , 22°斜 ²	やや 粗	良	にぬく 褐色	内底研磨痕あり
8・D	004-01	陶器 (瀬戸)	理鉢	—	—	—	33.8, 16.4, 12.4	— 内:コブテ ¹ , 斧輪 ² 外:コブテ ¹ , カット ² , 斧輪	—	—	—	6・Dを一個体として、全体 を復元した場合の状態
8	003-04	土器部	縦	E11	包含層	口縁部 小片	—	— 内:コブテ ¹ 外:コブテ ¹	密	—	淡黄褐色	包含層 (黒褐色砂礫混シルト)
9	003-03	土器部	縦	E11	包含層	口縁部 小片	—	— 内:コブテ ¹ 外:コブテ ¹	密	—	にぬく 黄褐色	包含層 (黒褐色砂礫混シルト)
10	003-6	土器部	縦	F・G12	3層	口縁部 小片	32.6	— 内:コブテ ¹ , 工具印 ² 外:コブテ ¹ , 小片 ²	密	—	明黄褐色	田耕作上 外底保付着
11	003-06	土器部	羽釜	F12	包含層	口縁部 1/12	—	— 内:剥離のため不明	密	—	淡黄褐色	

た状態を示す。常滑陶器編年における第3段階8型式に相当するものとみられ、時期は15世紀前半前後(室町時代前半)と考えられる⁽²⁾。

3 その他出土の遺物

8~11(第11図、写真図版8)は、黒ボク土(第6図:6層)の直上に堆積する遺物包含層(第6図:4・5層)と旧耕作土(第6図:3層)から出土した遺物である。

8~10は土器器の鍋である。いずれも南伊勢系土器であり、口縁部から頸部にかけての破片である。10は中型の鍋Bであるが、8・9については小片のため断定できない。口縁部は、いずれも内側に折り返されており、口縁端部は上方につまみ上げられてまとめられている。いずれも中世IVbのもので、時期は16世紀前半(戦国期)と考えられる。

11は土器器の羽釜である。南伊勢系土器であり、羽釜の鉗部分の破片である。小片かつ端部が残存していないため、詳細な形状や怪は不明である。

註

(1) 土器および陶器の分類・編年については、以下の文献による。

中世土器器: 伊藤裕俊「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年

瀬戸美濃大窯(陶器): 藤澤良祐「瀬戸美濃大窯編

年の再検討』『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 2002年、藤澤良祐「第1章第4節 瀬戸大窯の時代」『愛知県史別編 窯業2 愛知県 2007年常滑(陶器): 中野晴久「〔2〕常滑・渥美」概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年、中野晴久「渥美・常滑」『中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~』発表要旨集 2005年、中野晴久「第1章第2節 常滑窯」『愛知県史別編 窯業3 愛知県 2012年

(2) SE4001と同一構造となるSE3015(第3次調査)で報告されている南伊勢系土器の時期については、中世IVb期で16世紀前半頃と考えられることから、第4次調査で出土した鍋との時期的差はないともみられる(三重県埋蔵文化財センター「野添大辻遺跡(第3次)発掘調査報告」 2016年)。

(3) この常滑産の陶器捏鉢のみ、本調査と第3次調査で出土した他の共伴遺物との年代が異なっている。しかし、SE4001は石組が崩落してしまった井戸であり、埋土も一括性が認識できるものではないことから、混入の可能性が高いと考えられる。

V 平成26年度工事立会調査

1 調査の概要

(1) 報告の経緯

野添大辻遺跡では、1章で述べたように本発掘調査ができなかつた箇所については、工事施工時の工事立会を実施している。実施した工事立会の内容について、刊行されている発掘調査報告に併記する形で、その内容を報告している（第1表）。

平成26年度の工事立会については、第2次調査の1区・2区周辺で行われており、平成26年11月に実施した工事立会については、平成27年3月刊行の『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』において報告がなされている。しかし、平成27年1月に実施した工事立会については、その内容をこれまで報告できずにいたため、本書にて報告を行いたい。

(2) 工事立会範囲と内容

工事立会範囲（以下、調査区）は、県道38号線から集落内へと入るための道路部分であり、第2次調査の1・2区と接している。調査区は、第2次調査で検出されている道路2（SD2019）⁽¹⁾の路面上と重なる。道路2の幅については、既存道路があることによる調査範囲の制約から明らかにすることができなかつたため、既存道路除去に合せて工事立会を実施した。工事立会は平成27年1月9日に実施し、調査面積は11m²であった。

2 検出遺構の概要

検出した遺構は、溝状遺構2条とピット1基である（第12図、写真図版7）。以下の報文では、基本層序、遺構の順に述べることとし、遺構については遺構種別ごとに記述する。

(1) 基本層序

把握された基本層序は、以下のとおりである。

1：現造成土（道路に伴う盛土）

2：灰色シルト層（旧耕作土）

3：明黄褐色粘土（段丘基盤層）

遺構は、旧耕作土直下にある3層上面で検出した。

第2次調査を含む既往調査で確認されている層序対比をすると、1層はI層、2層はII層、3層はVI層に対応する。このうち3層は、当地の段丘を構成する基盤層である。この段丘基盤層の上に、本来は黒ボク土が堆積していたと考えられ、中世以降に大きく削平を受けているとみられる。

(2) 遺構

溝状遺構1（第12・13図、写真図版7）

調査区西壁面に沿って検出した溝状遺構である。長さ4.6m、幅約0.5mを確認し、溝状遺構2およびPit1と重複しているが、切り合い関係は不明である。

溝状遺構1は、第2次調査で確認されている道路2（SD2019）の東側上端にあたると考えられる⁽²⁾。調査区の南東隅で、ごくわずかに路面に相当する部分を検出したが、砂利敷きや硬化面は確認できなかつた。今回の調査で、東側上端部分を確認することができたことから、第2次調査でわかっている西側上端部分を合わせると、幅2.8～3.1mの道路であることが明らかとなつた。時期については、出土遺物から第2次調査時の道路2と大きな時期差はない。

溝状遺構2（第12・13図、写真図版7）

調査区北壁面に沿うかたちで検出した溝状遺構である。長さ0.9mについて確認し、溝状遺構1と重複しているが、切り合い関係は不明である。

溝状遺構2は、検出された位置関係から第2次調査で確認されているSD2020・2058に対応するものと考えられる⁽³⁾。SD2020・2058は、中世以降の熊野脇道の一部と推定されており、出土遺物の時期からも溝状遺構2も同様の解釈が与えられよう。

Pit1（第12図、写真図版7）

調査区西壁面で検出した径0.5～0.57mで、平面が梢円形を呈するピットである。溝状遺構1と重複しているが、切り合い関係および時期は不明である。

註

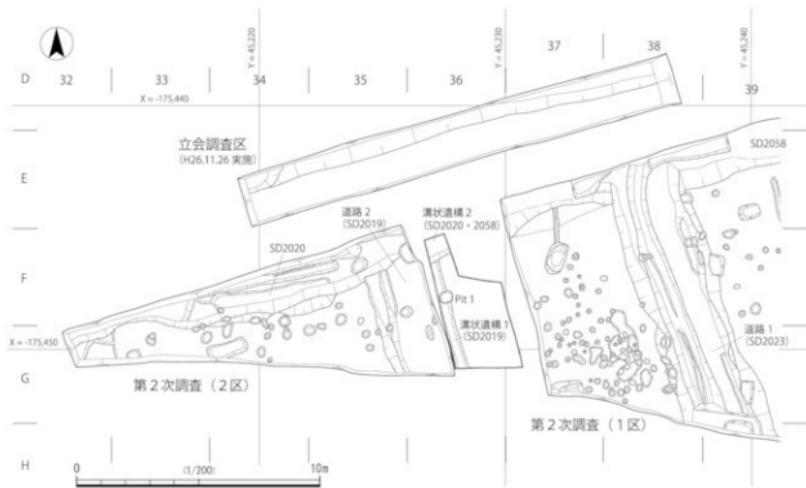
(1) 三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第2次）発掘調査報告』2015年

(2) 前掲註（1）文献

(3) 前掲註（1）文献



第12図 平成26年度工事立会調査区遺構平面図・土層図



第13図 平成26年度工事立会調査区および第2次調査1・2区(抜粙)遺構平面図

VI 総 括

1 野添大辻遺跡と熊野脇道

(1) 中世集落の様相

これまでの発掘調査で把握した中世の主要遺構について、南伊勢系土師器編年の時期区分に従い、以下にまとめ、参考に近世以降の遺構についても示す。

【中世Ⅱ期】 土坑10基、溝1条

【中世Ⅲ期】 道3条(熊野脇道・枝道)、井戸4基、土坑32基

【中世Ⅳ期】 据立柱建物8棟、柵(柱列)4列、井戸3基、土坑23基、溝7条

【近世～近代】 据立柱建物1棟、道1条(熊野脇道)、土坑2基

当遺跡における中世集落は鎌倉時代には萌芽しており、集落の盛行は中世Ⅳ期(15世紀後半～16世紀代)を中心とした戦国期である。そして、第2次調査で確認されている熊野脇道の一部と考えられる溝(S D2020・2058)は、出土遺物から中世まで遡る可能性が高く、据立柱建物については想定される熊野脇道にはほぼ沿って主軸をとる傾向があり、道を意識して建物が配置されたことが窺える。これらの点から戦国期の集落は、熊野脇道(滝原道)の存在と密接に関係していることが指摘できる。

(2) 集村化と熊野脇道

今までの発掘調査で確認できる当地の熊野脇道は、遡っても室町時代である。この脇道から派生する2条の枝道(道路1・2)も中世Ⅲ期(14～15世紀代)であり、脇道と同時期に機能した可能性が高い。そして、確認されている近世以前の据立柱建物は全て中世Ⅳ期(16世紀代)であることから、当地に建物が展開する頃には既に道が存在していたとみられる。つまり、熊野脇道という街道に規制されるかたちで、集落が形成されたと考えられる。

鎌倉街道沿いの埼玉県堂山下遺跡の事例では、13世紀後半に小村形態が出現し、15世紀以降に街道筋に建物が立ち並び、街道から奥まった場所に規模の大きい建物を伴う屋敷地が展開して、街村としての景観が成立するという⁽¹⁾。これと比較すると当遺跡

は、街村とまでは言い難いが、熊野脇道を核として掘立柱建物が展開する塊村⁽²⁾と評価できる。中世集落の研究では、小村または散村形態であった集落が14世紀頃から集村化する傾向が捉えられており⁽³⁾、その中で街道沿いへ集村が成立する事例があることから、当遺跡も熊野脇道沿いへ集村化した集落である可能性は排除できないだろう。集村化の契機は、水田開発や物流との関わりが指摘されている⁽⁴⁾。当遺跡で朝鮮ないし琉球風炉と呼ばれる青銅製風炉を写した珍しい瓦質の風炉や仏教信仰と結び付く偏平舟形光背宝塔型泥塔があることは、街道沿いに集村化した集落で人とモノが行き交った結果⁽⁵⁾、もたらされた産物である可能性が考えられる。そこには茶の湯をたしなむ有力者の存在が見え隠れし、熊野脇道という交通路、人とモノ、そして集落を掌握していた人物像が浮かび上がってくる。

2 結語

当遺跡で行った発掘調査では、断片的な集落の様相しか窺い知れないが、戦国期に熊野脇道という街道の存在を契機に集村化した可能性を指摘するに至った。第4次調査をもって、本事業に伴う野添大辻遺跡の調査は終了となるが、今後も中世集落について、集落の成立・展開とその要因を含めた動態を考えいく必要があろう。

註

- (1) 藤村 均「道と「宿」」『戦国時代の考古学』高志書院 2003年
- (2) 金田章裕「古代・中世遺跡と歴史地理学」吉川弘文館 2011年
- (3) 広瀬和雄「中世村落の形成と展開－畿内を中心とした考古学的研究－」『物質文化』50 物質文化研究会 1988年、金田章裕「微地形と中世村落」吉川弘文館 1993年
- (4) 坂本亮太「畿内の中世村落と生産・流通」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院 2011年
- (5) 佐藤亜聖「中世後期の流通と瓦質土器」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院 2011年

写 真 図 版



調査前状況（南西から）



調査地周辺風景（東から）



調査区完掘状況（南から）



調査区完掘状況（北から）



調査区壁面 A-A' 土層（南から）



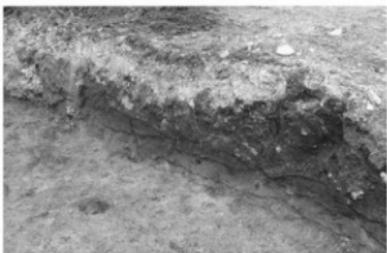
調査区壁面 B-B' 土層（北西から）



SE 4001検出状況・土層（南東から）



SE 4001半裁状況（南東から）



調査区壁面C-C' 土層（北東から）



Pit 1 土層（西から）



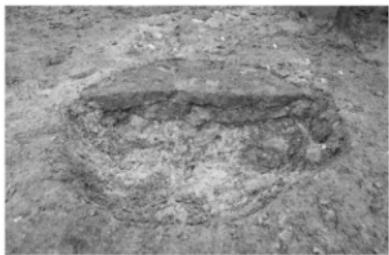
S K 4002・4003・4005・4006完掘状況（南東から）



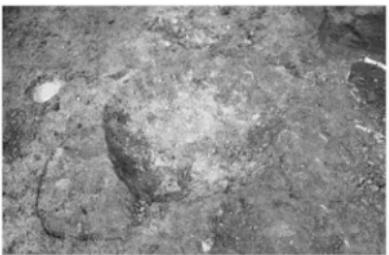
S K 4002土層（北から）



S K 4002完掘状況（北から）



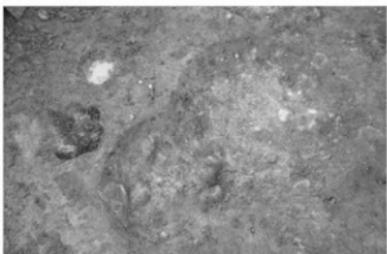
S K 4003土層（南から）



S K 4003完掘状況（南から）



SK 4005土層（北東から）



SK 4003・4005完掘状況（南から）



SK 4004土層（西から）



SK 4006土層（南から）



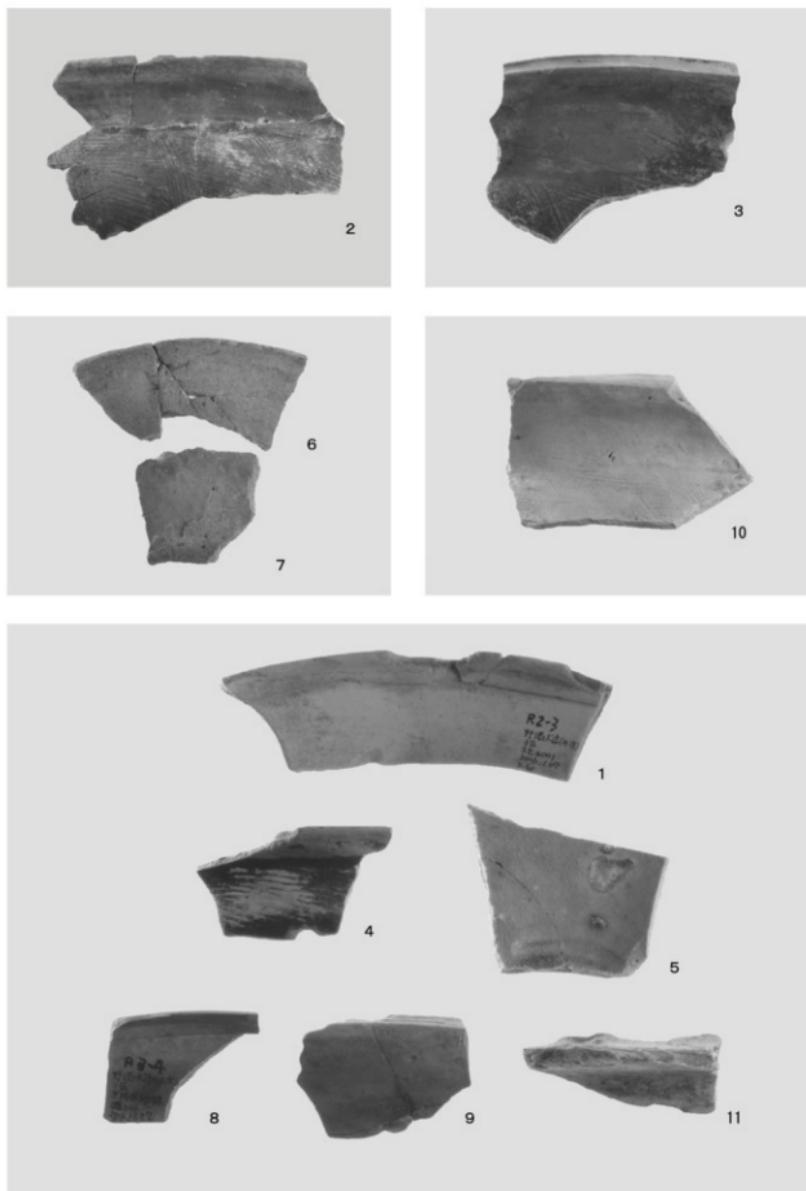
遺構検出作業状況（北から）



平成26年度工事立会調査区完掘状況（北から）



平成26年度工事立会調査区壁面土層（北から）



報告書抄録

ふりがな	のぞえおおつじいせき（だい4じ）はっくつちょうさほうこく							
書名	野添大辻遺跡（第4次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	373							
編著者名	渡辺和仁							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2017(平成29)年3月3日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぞえおおつじいせき 野添大辻遺跡	みえけんめいわくひらて 三重県度会郡 大紀町野添	24471	a 45	34度 24分 58秒	136度 29分 08秒	20161107 ～ 20161111	工事立会 80m ²	主要地方道 伊勢大宮線 (野添)地方 道路整備 (改築)事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野添大辻遺跡	集落跡	中世	井戸・土坑	土師器・陶器				
要約	野添大辻遺跡は宮川右岸の段丘上に立地し、遺跡の中央には中世～近世の熊野脇道（瀧原道）が貫いでいる。当遺跡では、主要地方道伊勢大宮線（県道38号線）の道路拡幅工事に伴い、平成26年度までに第1～3次にわたる発掘調査が行われており、本調査は第4次調査にあたる。							
	本調査は、第3次調査で調査ができなかった部分を道路本体工事の施工に合せて実施した。 確認した遺構は、戦国期の井戸1基、時期不明の土坑5基、落ち込み状の遺構2基、多数のピットである。井戸からは井戸枠を確認することができます。埋土からはチャートや砂岩の石材が土中に入り乱れた状況で出土した。石材の出土状況から、井戸枠の石組が崩落してしまったものと考えられる。出土した南伊勢系土師器や瀬戸美濃産・常滑産の陶器から、井戸の時期は16世紀前半頃と考えられる。また、遺物包含層からは室町時代を中心とする南伊勢系土師器の破片が出土した。当遺跡における中世集落の一端を本調査で改めて確認することができた。							

三重県埋蔵文化財調査報告 373

野添大辻遺跡（第4次）発掘調査報告

2017(平成29)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 共立印刷株式会社